

## 帝國主義の型について

— ウィンズロー教授の見解を中心として —

清水嘉治

帝國主義が二十世紀の世界を形成する決定的な諸力の一つであつたことは、はや自明の理であろう。こんにち帝國主義の諸問題は、社會科學にとって最重要な課題である。この點現在内外の政治、經濟の兩學界を問わず帝國主義研究の文獻が數多くみられることから明瞭である。これらを見れば現代帝國主義研究には二通りの分析方法があるようにおもわれる。一つは帝國主義の古典的時期（一八七〇年—一九一四年まで）を設定し、この時期における先進國の獨占資本の生成、發展を構造的に究明することであり、二つには帝國主義に關する代表的な諸勞作を歴史的、理論的、さらに思想的に再検討してゆくことである。

ここではとくに第二の帝國主義の古典的勞作を再検討する視點にアプローチしてゆくために、まずウィンズローの論稿および勞作「帝國主義の型」をとりあげ、彼の型規定にしたがつて

紹介し、同時にかかる型規定を必然化する彼の論理の缺陷を指摘し、つぎに彼のいう「マルクス主義的帝國主義論」の學說史的理解の限界をつきとめてみたい。

いうまでもなく一九世紀末期から二十世紀初頭にかけて、世界の主要な資本主義諸國が自由競争を典型とする産業資本主義から獨占資本主義に轉化したことは一般的に知られている。この時期における先進國と後進國との政治經濟的諸關係は最も暴力的な關係を示した。つまり現象的には先進國は後進國にたいして安價な原料資源、資本投資の捌け口、工業製品市場の無制限な要求獲得がみられた。かかる過程をホブソンは一九〇二年に「帝國主義論」の中で示し、とくに先進國民による後進國の搾取、先進國民における「寄生主義の發達」をのべた。またヒルファーディングは、かかる現象の內的構造に視點をむけ、帝國主義はいわば金融資本から發生するものであり、巨大な金融獨占體が最大の利潤をめざして世界的に鬭争することから必然的に生れるものだとのべた。さらにレーニンは、資本主義の最高の段階としての帝國主義を把握し、その五つの基本的特徴、1. 生産の集積、集中—獨占、2. 銀行資本と生産資本との融合—この金融資本とを基礎とする金融寡頭制の形成、3. 資本輸出の重要性、4. 國際獨占的資本家團體の形成、5. 領土的分割の完了を明示した。

かかる古典的「帝國主義論」を巨星として、その周圍に多くの「帝國主義論」の衛星が存在した。これらの「帝國主義論」の諸勞作を當時の社會、經濟的背景の中で、經濟學史的に、思

歴史的に正しく位置づけることが、はじめにかいた第二の課題に答える有力な論據となるであろう。コロンビア大學で政治・經濟學を専攻し、永い間、帝國主義問題にとりこんでいるウィンズロー教授は、直接的に第二の問題意識からではなく、權力問題を政治學的に明示することを目的とするが、帝國主義論の型規定にたいしては學史的に問題を提出しているので、ここに紹介し論評することにする。

## 二

彼はまず帝國主義にかんする諸見解をつぎの四つの型にわけて展開する。(一)マルクス主義的帝國主義論、(二)自由主義的帝國主義論、(三)經濟的帝國主義をめぐる歴史家たちの帝國主義論、(四)社會學的帝國主義論である。

第一のマルクス主義的帝國主義論については現代帝國主義が資本主義を基盤にして成立する點で原則的に一致しているが、多くの論者は異つた帝國主義論を展開するという。その代表的な人としてカウツキー、ローザ、バウアー、ヒルファードینگ、レーニン、ローラ、バブロヴィッチ等をあげる。つぎに帝國主義は資本主義の「政策」か、「段階」かによって二つにわかれる。「政策」の立場をとるのがカウツキー、バウアー、ヒルファードینگ等の「帝國主義論」であり、「段階」とする立場が、ローザ、レーニンの「帝國主義論」であるという。この點ウィンズローは深い論争點を何ら提出せずにとりあげる。さらに帝國主義の支配的要因を産業資本に求めるものがカウツキ

ーで、金融資本に求めるものがヒルファードینگであるといっている。第一の型についていうと帝國主義は資本主義の過剰生産にもとづく點を重視する。この立場がローラ夫人である。このローラがレーニンをヒルファードイングの「俗流化」であり單に獨占を強調するにすぎないのだといって、ウィンズローは無批判的にとりあげ、ローラとローザとは「過剰生産」の面で共通點をもっているという。またバブロヴィッチは、マルクス主義的帝國主義論に屬するがレーニンの定式化には批判的である。帝國主義の問題の核心は獨占一般でなく鐵鋼業での獨占であり、帝國主義は、大企業の支配的部門の獨占からおこる見解を示すのである。このようにウィンズローのマルクスの帝國主義論理解は、「帝國主義の型」で詳しくみられるが、一面的であり、とりわけウィンズローがレーニンの「帝國主義論」を主體的にうけとめていないことは明瞭である。

第二の自由主義的帝國主義論をとく代表的な論者は、J・A・ホブソンであるという。ホブソンの基本的な考え方は、帝國主義は過少消費、過剰貯蓄にもとづく所得分配の不平等に起因するから、この不平等を除去すれば帝國主義は消滅し、したがって全資本主義體制を革命的にでなく改良的に變革すればよいという見地にたち、いわゆる自由主義者の見解はこれに近いというのである。

第三に經濟的帝國主義をめぐっての歴史家たちの見解であるが、これは第二のホブソンの考えと多くの點で共通性をもっていること、したがって第二と第三を結びつけてよんでもよい。

ここでウインズローは、ムーン<sup>(10)</sup>、バーンズ<sup>(11)</sup>、マロー、ナイト<sup>(12)</sup>、ニアリング<sup>(13)</sup>、フリーメン、ホーヴェ<sup>(14)</sup>、カルバートソン<sup>(15)</sup>、フォルクナー<sup>(16)</sup>等の見解をかんとんにあげている。「歴史家たち」というのはマルクス主義および自由主義の兩陣營に系譜上所屬しないし、また方法論もたゞに資本主義の發展を現象的に實證的に歴史分析をしてゆく立場であるようにおもわれる。にも拘らずまず帝國主義の一原因として國內における過剰生産物、過剰資本をあげ、これが必然的に國外に捌け口を求め見る見解を示す點、ホブソンのと解してもよい。この系列に屬するものがムーア、バーンズ、ホーヴェ、カルバートソン等である。つぎに帝國主義を近代資本主義一般と同じ内容として考えるクノーの見解があげられる。この見解は、「資本主義の發展は不可避であり、進歩的である。だから帝國主義もまた進歩的である。だからまたわれわれは帝國主義の前にうやうやしくひざまづき、これを禮さんしなければならぬ」點に特徴的に見出せる。すなわちニアリング、フリーマン、カルバートソンの諸著作がこれである。第三の見解のうちマロー夫人の見解は若干異なる。彼女は債務國の諸條件への政府の干渉を眞正帝國主義の必然的特徴とみなす。同様にジュンクス、ナイトは、アメリカとヨーロッパの帝國主義の間には基本的な共通點より、多くの相違點がみられるという。つまりアメリカと西歐との風土的相違から帝國主義の性格の相違を見出す、第三の見解は多種多様である。

さいごに第四の社會學的帝國主義論であるが、この立場の代表的見解はシュンペーターである。ウインズローは經濟的帝國

主義論と関連づけて、最も新しい野心的な特筆する價値のある帝國主義論敘述の鍵が、このシュンペーターの帝國主義論に見出すことができるというのである。シュンペーターは、「帝國主義はいわば隔世遺傳的なものである」<sup>(17)</sup>。帝國主義は、「現在の生活環境から生れてくる要素ではなく、過去の生活環境から生れてくる要素である。經濟史觀的にこれを言えば、現在の生産關係から生れる要素ではなく、過去の生産關係から生れる要素である。それは、社會構造の隔世遺傳であり、感情的反應にかんする個人的、心理的慣習の隔世遺傳である」<sup>(18)</sup>。この觀點に立ってシュンペーターの敘述を、さらに「帝國主義の論稿」の中で、詳細に述べるのである。ウインズロー自身、この立場に半ば完全に没入しているといつてもよいであらう。だから、シュンペーターの定義にもとづいて、帝國主義は國家の際限なく擴張を強行しようとする無目的な素質であるとしている。したがって彼によれば民族的統一、より良い經濟的または物質的利益、海外への出口等の具體的目的を一定期間追求する國家のあらゆる活動は帝國主義でないという。帝國主義と資本主義との關係において、シュンペーターにしたがって「純粹に資本主義的な土壌の上には帝國主義的衝動は育ちにくい」とのべる。すなわちそれは封建的桎梏から解放され、民主主義、合理主義の勝利した産業社會には帝國主義は發生しないというひそかな見解を露呈しているわけである。

以上ウインズローの論稿、著作の中で展開している帝國主義の四つの型を素描的にのべたのであるが、その具體的内容、さ

らにかかる四つの型規定を必然化している論理を追求しなければならぬが、ここではその餘裕がないので、ウインズローの論理の缺陷を指摘しておこう。彼は四つの型が成立する背景を完全に無視しているということである。すなわち帝國主義の古典的時期の社會・經濟的背景、英、獨、米、佛の各資本主義の國際的資本の對抗、競争、同盟、矛盾の問題に、いかに對決して帝國主義論を展開したかという追求なしに、多くの帝國主義研究者のタイプの特徴を羅列的に分類して、型規定をしているのである。問題は帝國主義論の生れてくる必然性を説明する中で、各帝國主義研究者のヴィジョンを鮮明に描き、帝國主義論の理論的、歴史的諸問題の典型を指摘することが重要なのである。その上で、四つの型の帝國主義論の主要特徴を明示すべきであろう。したがって第一のマルクス主義的帝國主義論、さらには經濟的帝國主義論の内容把握も不充分といえるだろう。この點はさらに帝國主義論の經濟學說史的解明の點でも、その意圖は評價できても、問題意識は單線的取りあげ方である。したがって帝國主義論の古典的諸著作であるホブソンの「帝國主義論」、ヒルファーディングの「金融資本論」、レーニンの「帝國主義論」等のいわゆる帝國主義論史上の巨星を把握する思想史的位置づけが見失われる缺陷をもっているのである。次にその一例として「帝國主義の型」での問題を三點に要約してのべてみよう。

### 三

第一は、スミス、マルサス、シスモンディ、セイ、リカードウ、マルクス、ホブソン等により帝國主義論の經濟的基礎がどう理解されてきたか、これらの承譜を辿ることによってそれを明示すること。

第二にマルクス理論の中に近代的帝國主義論の萌芽的視點が用意されているかどうか。

第三に、マルクスの後継者たちは帝國主義論をどう展開したか。(この類型化は、本稿の前記の第一の型でふれた。)

つまり第三の問題を明示するため、第一、第二の形で追求してゆくのである。かかる問題の提出の仕方にも異論をもつが一應、三つの問題を簡単に素描してみよう。第一の點についてみると、ウインズローは、スミスが國際貿易の障害、植民地獨占のシステムに反對し、貿易の自由と進歩した植民地政策を主張し、所謂反重商主義論を作るのに重要な役割を果し、それが十九世紀の反帝國主義の見解になったことをのべ、だがスミスには、自由競争の原理を前面におしだし、過剰生産、過少消費の展開はなかったといひ、しかるに、その後の經濟學者たちが、スミスの「國富論」に従って經濟理論を作る場合、つぎの二つの思想的傾向が生れてきたという。すなわち一つは經濟的帝國主義にたいして消極的傾向を示した。その著しいものがセイとリカードウであるという。つまりリカードウは資本主義は完全な均衡を保ちうるから過少消費は資本主義の生命を決する條件にはならないといひ、セイは有名な賤賂理論にしたがい植民地はアナクロニズムであり、正しい經濟政策が施行されれば消滅

すべきものであるという立場にたつという。二つには經濟的帝國主義論にたいして積極的傾向を示したものとシスモンディ、マルサスをあげる。彼らは資本主義が過少消費から必然的に植民地獲得の方向に向わざるをえないこと、すなわち一國の經濟調和では満足せず外國への擴張を主張する側面があるという。

これら二つの傾向が經濟的帝國主義論の歴史的起源であり、そしてマルクスが第一の經濟的帝國主義の消極的傾向の系譜につながり、ホブソンが第二の積極的傾向の系譜につながるとい、そして經濟的帝國主義の基礎を確立したといふのである。

次に問題の第二点であるが、ここではウインズローは帝國主義の鍵がないことを指摘する。すなわち一つは、現代帝國主義の經濟的分析には外國貿易と金融の両面を排除する資本主義發展の理論は意味がないといひ、マルクスには資本主義にとって外國貿易が非本質的であり、信用の役割を輕視するという考えがあったことを指摘する。にも拘らずマルクスは外國貿易について(1)利潤率低下傾向の理論、(2)過少消費説の見解をとっていたといひ、この(1)と(2)が相互に矛盾するとし、ともに後繼者たちにより帝國主義論のための理論的基礎としてうけとられなかったことをウインズローはいふのである。だから彼によればさらにマルクスの再生産論の抽象性は無視されてしまい、「マルクスのような再生産論の展開ならば資本主義は自己均衡的機構」であるから、マルクスは結局セイ、リカードウの系譜につらなりいわゆる「均衡論者」としてうけとるので

ある。また大膽にも彼はマルクスは帝國主義の原因で果す信用の役割を輕視したといひ、したがってマルクスの後繼者たちの或るものはマルクス理論の中に帝國主義の鍵を探し求め、「均衡論」をかつき、或るものは帝國主義は金融資本の政策とみなしたという。この點ウインズローが「資本論」大系と「帝國主義論」との關係の理論的諸問題をいかに安易に素通りしているかがわかるであろう。ともあれ第三の問題點としてマルクスの後繼者たちには二つの主要な傾向がみられるとして帝國主義をはじめにかいたように「段階」と「政策」の両面から把握する。すなわちまえにもふれたがヒルファディングは資本主義的擴張を政策の形態に還元し、ローザは帝國主義を資本主義發展の不可避的段階たらしめる資本主義の擴張の必然性を明らかにする立場にたつといふのである。ここで明確にいえることは、ウインズローの意圖はヒルファディングが均衡の體系として現代資本主義を把握しているのだということ、したがってセイ、リカード、マルクスの系譜につながる。だから經濟理論と帝國主義との間に必然的連關がない。だがローザの場合には、これと正反對のことがいえるということになる。つまりウインズローは資本主義の經濟理論それ自體の中から帝國主義政策の必然性を論證すべきだといふ點を指摘したのである。だがこの點ウインズローの積極的理論の展開はないといえる。したがって「帝國主義論」の「經濟學史」的究明も、このように結局は不成功に終つていってよいであらう。

「帝國主義論史」を究明する場合、最も重要なのは各タイプ

のあれもこれらの平面的指摘ではなく問題は、「帝國主義論」の研究者たちが、帝國主義段階における資本主義的諸關係の基本的特徴を、どのように把握し、どう理論を展開しているかをその當時の社會經濟・政治の發展過程で明示することである。この點例えばマルクス主義的帝國主義論の研究者たちが、帝國主義段階での資本諸關係を、農業と工業の發展の問題、株式會社、金融資本、獨占の成立と發展、景氣變動の様相、商品、資本の輸出、軍備の擴大と戰爭の危機、國際獨占體の矛盾と同盟等の形で究明し、労働運動の政治化の必然性にいかに明確な洞察力と展望を與えたかを論證すべきであり、さらに彼らの思想史像を盡きだすことが、現代につらなる問題なのである。つまり一つには彼らの正統派と修正派の論争史を、立體的に構成することであり、その中で當時の問題が何であったか、その解決の方向がどこにあったか、さらにそれを核心にして把握しているかどうか、それらがこんにちの問題にどう繼承されているか、この點、本稿の第一の型把握でも素通りしてつとむかねばならない。これをウインズローに求めるのは無理なのであるうか。

- (一) Paul M. Sweezy, *The Present as History, Essays and Reviews on Capitalism and Socialism*, 1953 (留重入譯「歴史としての現代」一二二頁) スウージーは本書の中で、「帝國主義にかんする一マルクス主義者の見解」という章をもうけ帝國主義に鋭く觀察を與えている。(二) マルクス主義からの帝國主義論の再検討として學說展

望を明示してつとむものとして佐藤金三郎・伊藤光晴「經濟學界の展望」(「思想」一九五七年十一月號)がある。

- (三) E. M. Winslow, "Marxian, Liberal a Sociological theories of Imperialism", *The Journal of Political Economy*, Dec. 1931 この稿は、この論稿を中心としてあけ、同時に一九四八年の勞作「The Pattern of Imperialism, Columbia University Press, New York」の重要論點をとりあげることとした。

- (四) 詳しくは拙稿「オノンン帝國主義の經濟學的性格」(「經濟系」三三號)および靜田尚「帝國主義の經濟學」(京大「經濟論叢」七〇の三、七四の三)をよめ。

- (五) マルクス主義的帝國主義論に関する最近の著として論稿としては、相原茂編著「マルクス經濟學の發展」(河出經濟學說全集八卷)がある。

- (六) K. Kautsky の代表的な著として「Der Imperialismus», *Die Neue Zeit*, XXXII (1914) SS. 902~22, がある。

- (七) O. Bauer の代表的な著として「Die Akkumulation des Kapitals», *Die Neue Zeit* XXXI (1913), SS. 831~38, 862~74 がある。Die Nationalitätenfrage und die Sozialdemokratie, Vienna, Verlag der Wiener Volksbuchhandlung, Marx-Studien, 1907. 2d ed. がある。(八) L. Laurat, *L'Accumulation du capital d'après Rosa Luxemburg, suivi d'un aperçu sur la discussion*

- du problème depuis la mort de Rosa Luxemburg, Paris, Librairie des Sciences Politiques et Sociales, 1930.
- ( 6 ) M. Pavlovitch, *The Foundations of Imperialist Policy*, London. The Labour Publishing Company, 1922.
- ( 7 ) T. P. Moon, *Imperialism and World Politics*, New York, 1926.
- ( 8 ) E. Burns, *A Handbook of Marxism*, New York, 1935.
- ( 9 ) M. Knight, "Water and the Course of Empire in North Africa," *Quarterly Journal of Economics* XIII (Nov. 1928) pp. 44—93.
- ( 10 ) S. Nearing, "The Twilight of Empire, an economic interpretation of imperialist cycles, New York, 1930.
- ( 11 ) B. J. Hovde "Socialistic Theories of Imperialism Prior to the Great War," *Journal of Political Economy*, XXXVI (Oct. 1928) pp. 569—91.
- ( 12 ) W. S. Culbertson, *International Economic Policies*, New York, 1925.
- ( 13 ) H. U. Faulkner, *American Economic History*: New York, 1931.
- ( 14 ) L. H. Jenks, *Our Cuban Colony*: New York, 1928.
- ( 15 ) ( 16 ) J. Schumpeter, *Imperialism and Social Classes*, New York, Eng. tr. 1951 (1st ed. 1919). pp. 84—86.
- ( 17 ) E. M. Winslow, *The Pattern of Imperialism*, chap. 5, 6, 7, pp. 92—188.
- ( 18 ) E. M. Winslow に対する具體的な批判は紙数の關係上省略し、他の機會に充分にはたし、かたよごと帝國主義の方法を積極的に展開するつもりである。
- ( 一九五七年十二月十五日脱稿 ) ( 關東學院大學講師 )